神奈川県立総合教育センター研究集録 24:25～28. 2005

幼稚園・小学校間連携によるカリキュラム開発研究

―生活科の単元開発をとおして―

三　堀　　仁[1]

幼児期の教育と小学校の教育との適切な接続が求められている。幼稚園と小学校の連携を進めるためには、教員同士の相互理解を深め、連続性のあるカリキュラムを開発することが必要である。幼稚園と小学校の接続期における生活科の交流学習を例に単元開発を行い、より有効な連携のあり方を探った。

はじめに

本研究は、「学校間連携によるカリキュラム開発」を、幼稚園と小学校（生活科）との連携について行うものである。本稿は、調査研究協力員とともに進める２カ年計画の研究における１年目の「中間まとめ」である。

平成 16 年 10 月 29 日、中央教育審議会（以下「中教審」と略す）は「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（中間報告）」を文部科学大臣に提出した。幼児教育を正面から取り上げた中教審の中間報告が出されたのは初めてのことであり、それだけ幼児教育を重視する動きが高まっていることがうかがえる。

中間報告では「幼児の生活の連続性及び発達や学びの連続性を踏まえて幼児教育を充実していくことの必要性」などが提言されており、その具体的方策として、「幼稚園等施設の教育機能の強化・拡大」「家庭や地域社会の教育力の再生・向上」「幼児教育を支える基盤等の強化」の三つがあげられている。

この三つの課題を解決するための重点施策が七つにまとめられている。その一つに「小学校教育との連携・接続の強化・改善」がある。幼児教育から小学校教育への円滑な移行が求められており、そのためにはどのような連携や接続が必要なのかを考えていかなければならない。

幼稚園と小学校の連携（以下「幼・小連携」と略す）を重視したカリキュラムの開発が今まさに求められているのである。

研究の内容

１　幼・小連携に関する研究の経緯

文部科学省は、平成 13 年３月に「幼児教育振興プログラム」を策定した。このプログラムでは、幼・小連携を推進するためには、教員間の交流、幼児・児童・保護者間の交流、幼稚園・小学校の教員免許の併有などを推進することが重要であるとの考え方が示されている。

これを受けて平成 13 年度から都道府県を実施主体とした「幼・小連携に関する総合的調査研究」が実施され、さらに平成 15 年度から厚生労働省と連携を図って「就学前教育と小学校の連携に関する総合的調査研究」が行われている。文部科学省はこの調査研究をイメージ図で表しているが、その図では、就学前教育（幼稚園・保育園）から小学校への「教育内容の連続性」と、教員同士の「相互理解」や幼児・児童の合同活動などが強調されている。

東京都中央区立有馬幼稚園・有馬小学校は、文部科学省が平成 11 年度より設けた「幼稚園と小学校の連携を視野に入れた教育課程の研究」の研究開発学校の最初の指定校である。平成 14 年３月に出された有馬幼稚園の「研究開発実施報告書」によれば、小学校との連携をふまえた教育課程の編成のためには、園内の教師のティーム保育の推進、小学校教員との日常的な情報交換（交流時の事前事後の打合せや授業・保育参観）、地域の保育園との交流、保護者や地域との連携などが重要であるとの考え方が示されている。

一方、本研究のスーパーバイザーであるお茶の水女子大学の藤江康彦助教授がかかわる同大学附属幼稚園・小学校も、平成 13 年度から研究開発に取り組んでいる。ここでは、特に年長後期から１年生１学期を接続期（５月の連休前までを重要期間）と定め、幼・小のなめらかなカリキュラム上の接続のあり方を研究している。

このほか、多くの国立大学附属幼稚園及び附属小学校で幼・小連携に関する研究が進められている。

こうした研究の経緯を見ると、教員同士の相互理解を深めることが幼・小の連携にとって不可欠な要素であることと、学びの連続性が見えるカリキュラムを開発し、実践していくことの大切さが強調されていることが分かる。

---

1 人材育成課　研修指導主事

２　具体的な取組

これまでの幼・小連携に関する研究から「教員同士の相互理解」と「連続性のあるカリキュラム開発」という二つの視点が見えてきた。しかし、どのように相互理解を深めていけばよいのか、どのようにカリキュラムの連続、交流を考えていけばよいのかといった点が十分明らかになっていない。そこで、教員や保護者の意識調査をもとに実態を把握し、藤江助教授から「幼・小をなめらかにつなぐ」考え方の指導を受け、実践研究や単元開発を通してこれらの課題にアプローチすることとした。

（１）幼・小連携に関する教員の意識の実態

幼・小連携に関する教員の意識について調査研究協力員（幼稚園教諭２名、小学校教諭２名）の協力を得て実態把握を行った。「子どもの入学にあたって、教員として感じること」について次のような思いが寄せられた。

〔幼稚園の教員から〕

（子どもに対して）
・席についての授業を受けられるか。一斉授業に戸惑いを感じないか。教科の切り替えができるか。
・話を理解し、行動に移すことができるか。
・新しい集団で、友だち関係がうまくできるか。
（小学校の教員に対して）
・幼稚園では最年長としていろいろなことを任せているが、小学校に入ると一番下の学年ということで上級生に手伝ってもらっている。自立できているところを摘み取っていないか。
・個人差に応じた指導をしてもらえるか。一人ひとりに細かい気配りをしてくれるか。

〔小学校の教員から〕

（子どもに対して）
・集団生活がスムーズにできるか。
・分からないときなど、自分から何らかのアクションを起こせるか。
（幼稚園の教員に対して）
・子どもの個性を生かすということで、好きなことが中心になりすぎていないか。面倒なことは、やらないうちから「できない」という子どもが多い。

子どもの「自立」についての意識の差は、幼・小の連携を話題にするときによく指摘される点である。自立した年長児に対して指示待ちの１年生という構図は、幼稚園と小学校の教員がとらえる子ども観の違いが浮き彫りにされていると言えよう。しかし、研究者の中には、子どもが小学校の教員に対して愛情や承認を受けようとする欲求の表れであると見る立場もある。その場合も生活環境の大きな変化による不安や緊張感が原因であるとしているので、やはり幼稚園も小学校も「なめらかな接続」が十分できている段階に至っていない現状があることは確かであろう。

「一人ひとりを見てくれるか」という幼稚園側の不安も、「好きなことばかりでなく幅広い経験を」という小学校側の思いも理解できることである。しかし、小学校も個を大切にしているし、幼稚園も様々な体験をさせようと努めている。この意識調査から、お互いの子ども観や指導観についてもっと「知る」、そして「理解する」ことの必要性を汲み取ることができる。

（２）実践を通しての相互理解

藤江助教授は、幼・小の連携における子ども同士の交流は教員の相互理解を深める契機であるとの考えを示している。園児と小学生が同じ活動を行っている様子を観察して、幼・小の教員が話し合い、子どもの育ちをイメージしたり、子どもの学びの芽を見つけたりする過程を通して、相互理解を深めていくことができるであろう。また、それがより有効な連携のカリキュラムづくりにつながっていくと考えるのである。

こうした考え方を受けて、お互いを知り、理解するための取組として、調査研究協力員の協力を得て「子どもの交流活動を通した教員同士のかかわり」についての実践研究を行った。

ア　「あきとあそぼう」（生活科）の実践

Ａ小学校の第１学年では、近くの幼稚園の園児を招待して秋祭りを開く計画を立て、幼稚園側に呼びかけた。夏休み明けに幼稚園との話し合いの場を設け、園児と１年生でペアを組み活動させるなどの具体的な交流の方法について協議を行った。

交流活動では、普段はサポートが必要な１年生も、年下のペアの園児に対して「しっかりしなくては」との意識が生まれたようで、「意外とできるんだな」と思われる場面が随所に見られた。

交流の反省としては、打合せをもっと綿密にする必要があるということであった。「自己紹介や握手をする場面があればよかった」「そもそも目的は何だったのだろうか」という問いが生まれるなどした。そして、「幼稚園の様子をもっと見てほしい」「１年生の生活科も見に来てほしい」との意見が双方から出て、教員間の相互理解の必要性を確認できたことは大きな成果であったといえる。

イ　「運動会に向けての交流」（生活科）の実践

Ｂ幼稚園では、隣接している小学校に呼びかけて運動会に向けての交流を進めた。しかし、子どもの意識の流れを大事にする幼稚園と、運動会という行事から活動を考える小学校とでは、練習についての意識が異なっていた。そのため、打合せにおいても、園児と 1 年生をどのように出会わせるかというきっかけづくりの段階からつまずいてしまった。指導計画上の流れがあることなどから、生活科の時間で行うことは難しいということになり、幼稚園側から呼びかけて、休み時間に「1 年生が園児に去年踊ったダンスの振付を教える」交流を始めることになった。

活動の様子を見守っていた小学校の教員の中には、「また違った子どもの姿を見ることができた。1 年生というと、どうしても最小学年という見方で接してしまうが、今回の交流のように自分より年下の子の前では立派なお兄さんお姉さんになっており、子どもたちの新たな一面を発見した」といった感想もみられた。

この交流がきっかけとなって、休み時間を使って教員間で授業や活動を見合ったり、連絡をとり合ったりすることができるようになった。「園と小学校の敷地の壁が少しずつ低くなってきた」との声が聞こえてくるようになった。

教員間の連携は、年に１度の情報交換だけの交流で終わらせるのではなく、双方の教育目標や内容を把握し、子ども観や指導観を理解しようと努めることが大切である。そして、具体的な交流活動の中で共通点や相違点に気づき、それを踏まえて新たな活動を考えていくことで相互理解はさらに深まると言えるであろう。

（３）幼・小の年間活動内容一覧表の作成

これまでに得られたことをもとに、二つ目の視点である「連続性のあるカリキュラムづくり」に取り組んだ。まず、調査研究協力員とともに幼・小の連携のための年間活動内容一覧表（モデルプラン）の作成を試みた。隣接している幼稚園と小学校を想定し、幼稚園の年長児の年間指導計画と小学校の生活科の年間指導計画をもとに作成した（第１表）。

上段の幼稚園の欄には「教師の願い」と「主な活動例」を幼稚園の年間区分の５期に分けて記入した。下段の生活科の欄には、「生活科のねらい」と「単元」を配列した。

期や月ごとに「こんな力を育てたい」という目標を立てた。自由な活動内容で指導する幼稚園と、活動の中にねらいが示されている小学校とを同じ表に整理するのは無理があるという指摘も予想される。しかし、幼稚園も小学校もお互いの年間指導計画を見合ったことがないという現状においては、一覧表にすることでどの時期にどのような活動が展開されているのかを双方が知ることができる点や、年間活動内容表を一緒に作成することで、交流活動を行うことが可能な時期を検討することができる点は有効と言えるであろう。

（４）活動の展開例

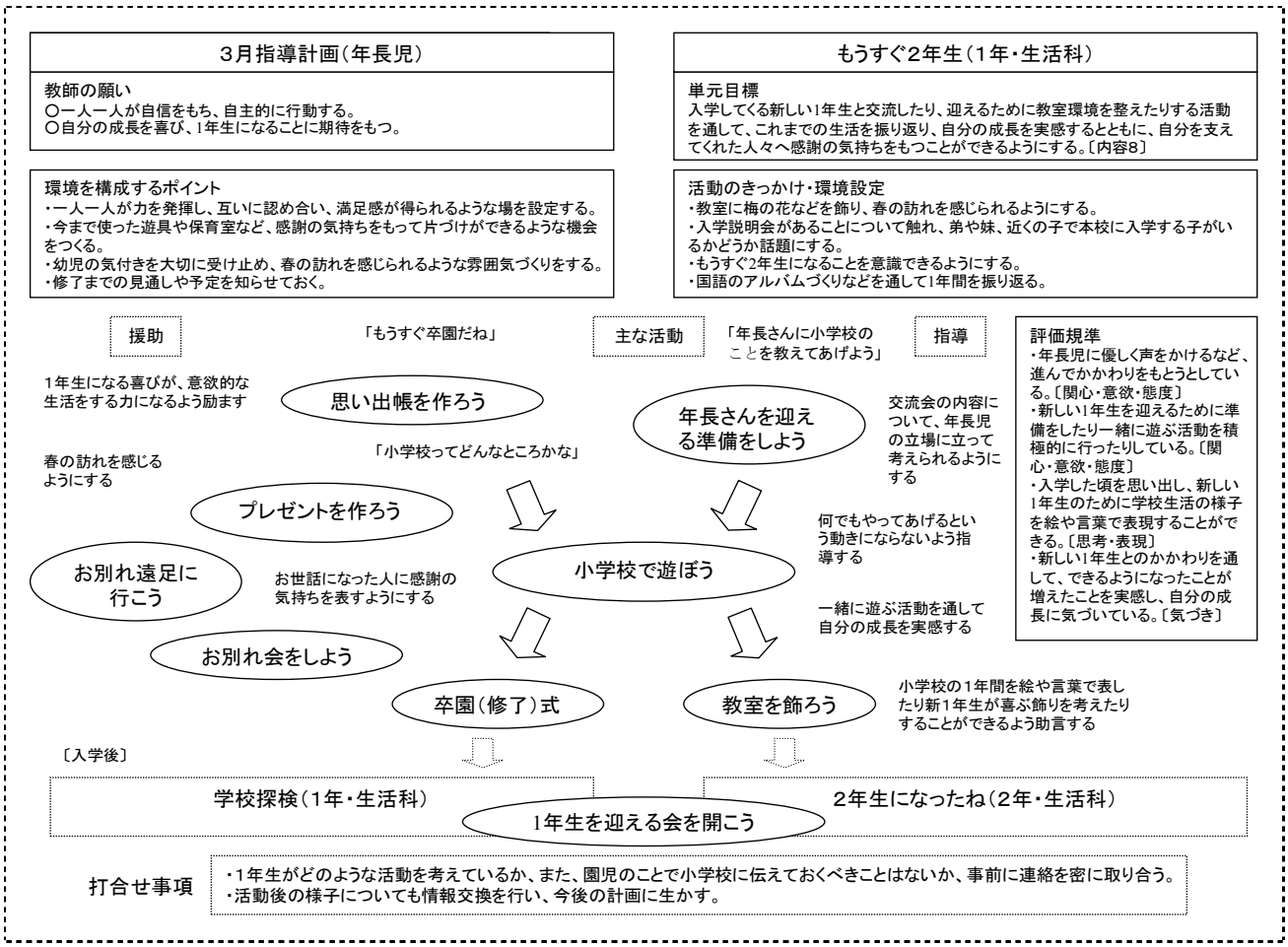
「活動内容の配列表よりも交流活動を含めた単元指導計画を具体的にどのように立てるかの方が重要である」との藤江助教授の助言を受け、第１表の年間活動内容一覧表のＶ期（３学期）の活動の一部について単元開発を行った（第１図）。

左側に幼稚園の活動展開、右側に１年生の生活科の単元「もうすぐ２年生」の活動展開の主な流れを記した。交流部分は中央に示し、それぞれの活動の流れの中に「小学校で遊ぼう」がどのように位置づいているかが分かるようにしたものである。幼稚園が重視する環境構成のポイントを参考に、生活科においても活動のきっかけをどのようにつくるかを検討した。また、その後の予想される活動の流れを入れ、「なめらかな接続」を意図した。具体的に見ると、年長児に対しては、小学校への期待を胸に抱きながら小学校で交流を行い、入学後のイメージをもてるようにした。そして、４月からは新２年生とのかかわりを保ちつつ、生活科の学校探検に入るような流れを考えた。また、新２年生に対しても、１年生の生活科の延長として、自然な形で新１年生と交流を進められるようにした。

単元開発にあたっては調査研究協力員を幼・小のペアに分けて取り組んだ。幼稚園教育要領や小学校学習指導要領・生活の目標や内容との関連に留意しながら行った。今後は、交流時以外の部分も見えるようにするなどの工夫が必要である。

第１表　年間活動内容一覧表（部分）

		月	１　２　３　（Ｖ期）
幼（年長）	教師の願い		○学級やグループの中で一人一人が自信をもち、自分の力を発揮して遊ぶことができる。 ○生活の見通しをもち、自分たちで遊びを進めていく充実感を味わうことができる。 ○一年生になるという自覚をもち、自主的に行動することができる。
	主な活動例	途中省略	**日常の園生活、竹馬、こま、跳び箱、鉄棒、プレゼント作り、身の回りの片付けなど** ・自分なりに目的をもち、最後までやり遂げた充実感を味わう。 ・お世話になった人たちに感謝の気持ちをもつ。 ・遊びの中で文字や数に興味をもち、それらを使って遊ぶ。 ・成長の喜びを感じ、自信を持って卒園式を迎える。 日常活動
			どんど焼き　**節分**　**卒園式** 行事
			ドッジボール、サッカー、ごっこ遊び、リレー、鬼ごっこ、など ・友だちと考えを出し合いながら遊びが楽しくなるように工夫する。 ・いろいろな遊びを通して学級の一員としての喜びを味わう。 ・遊びを通して友だちの成長やよさに気付き、認め合う。 集団遊び
			氷、霜柱集め、雪遊び、春探しなど ・霜や氷、雪などの冬の自然に興味をもつ。 ・散歩に出かけ、春の息吹を感じ取る。 自然とのふれ合い
小1（生活科）	ねらい		○地域の正月行事に関心をもち、参加したり体験を話し合ったりして生活の様子の変化に気付くことができる。【内容5】 ○冬の自然を観察し、四季の変化を振り返ったり春の兆しをみつけたりすることができる。【内容5】 ○1年間の学校生活を振り返り、多くの人々に支えられて成長したことをたしかめ、新1年生のためにできることを考えることができる。【内容8】
	主な活動		**冬となかよし** ・お正月の行事について話し合ったり昔の遊びを体験したりする。 ・冬探しをしたり春の兆しを見つけたりする。 **もうすぐ2年生** ・1年間の学校生活を振り返る。 ・教室をきれいにしたり新1年生を迎える準備をしたりする。
小2（生活科）	ねらい		○自分の成長を支えてくれた人々に感謝するとともに、学校でも家庭でも自分の役割が増えたことを確かめ、これからも自信と意欲を持って生活しようとする気持ちをもつことができる。【内容2・8】
	主な活動		**もうすぐ3年生** ・家族にインタビューしたり写真を持ち寄ったりして、成長の記録を自分なりの方法でまとめ、発表する。



第１図　活動の展開例

３　研究の成果と課題

（１）今年度の成果

現段階の成果として、幼・小の連携を意識した年間活動内容一覧表を作成するとともに、生活科の単元開発ができたことがあげられる。また、教員間の「相互理解」は具体的な実践をとおして行うことによってより深まるということが分かった。

同時に、さらに明らかにしていかなければならない面も見えてきた。それは、園生活から学校生活への「生活のつながり」に着目することである。「なめらかな接続」のためには相互理解とカリキュラムの連続性が大切であるが、見えるカリキュラムの部分だけでなく、「生活のつながり」という見えないカリキュラムの部分にも焦点を当てる必要がある。今後の課題を見つけることができた点も成果と言えるであろう。

（２）次年度の課題

次年度は、生活科の単元指導計画をさらに改善するとともに、実践し検証を行う。また、園生活から学校生活への「生活のつながり」のあり方を模索するために、教員や保護者の意識調査を行うことが必要であると考える。見えないカリキュラムにも視点をあてた広い意味でのカリキュラム開発に取り組む方向である。

おわりに

本研究は学校間連携を扱った三つの研究の中の一つである。「12 年間の学びの連続」という広い視野から今後も幼・小連携をとらえていきたい。

［調査研究協力員］

平塚市立大野小学校　小澤　智子
小田原市立矢作小学校　二見　妙子
秦野市立東幼稚園　三嶽　さち子
南足柄市立岡本幼稚園　鈴木　えり子

［助言者］

お茶の水女子大学助教授　藤江　康彦

参考文献

お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校 2004 『幼稚園及び小学校における教育の連携を深める教育課程の研究開発』
文部省 1999 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館
文部省 1999 『小学校学習指導要領解説生活編』日本文教出版
藤江康彦 2004 『「つながり」と「交流」：幼小連携をめぐる幼稚園と小学校の意識の違いから』（『幼児の教育』2004 年 11 月号）フレーベル館